
気が付いたら、魔王の部下になってました・・・

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら、魔王の部下になってました・・・

【Nコード】

N9433Z

【作者名】

零堵

【あらすじ】

俺こと、初崎孝之は、気が付いたら、魔国、エデルドと言う所にいた。

そこで出会ったのは、魔国の魔王、マイ三世だった。

元の時代に戻りたかったが、全く帰り方が分からず、マイ三世に「帰る方法は？」と聞いた所

「そんな事より、私の部下になれ」と言われ、結局俺は、マイの部下になってしまった。

これから、どうなるのか全く分からなかったが、なんとか頑張つて

いじつと思っていたのである・・・

くプロローグく魔国に迷い込みましたく（前書き）

はい、零堵です。

新しく投稿します。

「プロローグ」魔国に迷い込みました」

気が付いたら、全く知らない場所にいた。

ここは、どこなんだ・・・？と辺りを見渡してみる。

そこは、部屋の中で、白で統一されていて、明かりも中世の世界に出てきそうなライトで

照らされていた。

窓があったので、窓の外を見て、驚く。

何故なら、伝説上の生き物と言われている、ドラゴンが数十羽飛んでいて

空を見ても、太陽が二つに見えた。

うん、どう見ても、ここは日本じゃないよな・・・と、思われる。

「一体、ここは何所だ・・・？」

俺は、これまでの事を思い出してみる。

確か、家の中で新しく買ったゲームをプレイしようとして、ゲーム機のスイッチを入れた瞬間

気が遠くなって、この場所にいたと言う訳だった。

自分の服装を確認してみると、服装は意識が無くなる前のそのままで、ジャンパーに長ズボン姿だった。

うん、ひとつ言える事は・・・この世界でこの格好って・・・変じやないか？と、思ってしまった。

「とりあえず、ここから外に出てみよう」

そう思つて、部屋の外に出ようと想着て、扉があったので、そこを開けてみる。

扉をあけると、長い廊下が現れた。

一方通行だったので、その道を真っ直ぐ歩くと、二つの扉があった。右の扉が、赤色の扉で、左の扉が青色をしていた。

俺は、どっちに行こうと迷ったが、覚悟を決めて、赤い扉を開けてみる。

中にいたのは、豪華なイスに座っている。美女がいた。

「貴様、何者だ？何所からこの、魔王の城にはいった？」

「ま、魔王！？」

「何を驚いている、私は第三代魔王の、マイ三世だが？お前の名は？」

「お、俺は初崎孝之、日本人だ！」

「日本・・・？それは、なんだ？」

「に、日本を知らない・・・？じゃ、じゃあここは？」

「ここは、我が魔国、エデルドだが・・・孝之、お前はまさか・・・勇者か？」

「そんな訳ないだろ！？てか、勇者っているの！？」

「もちろん勇者はいるぞ、我に戦いを挑んできて、うつとしいんだがな、まあ、戦うのは暇つぶしに丁度いいんだが」

「丁度いいのかよ！しかも、勇者との戦いが暇つぶし！？」

「何か問題でもあるか？」

「問題あるだろ！？はあ・・・なんか、つつこむのも疲れてきた・・・とりあえず、俺の事情を聞いて下さい」

そう言つて、俺は、魔王マイ三世に、ここに來た事情を話す。

すると、マイ三世は、こう言つてきた。

「ふむ・・・気がつけば、この国に迷い込んだつて言うのか・・・、孝之、お前は元の世界に帰りたいというのだな？」

「はい、出来れば、今すぐに帰りたいです」

「ふむ・・・、決めた、我の部下になれ」

「はい？な、なんで、俺が魔王なんかの部下に！？」

「それはだな・・・退屈だったからだ、勇者も最近現れてないしな、部下も勝手に人間国に遊びに行つてたりするし、しょくじきに言つて暇なのだよ、だから部下になれ、これは命令だ」

「嫌つていたら？」

「ここから出て行つて、無事でいられるのか？外は、魔族でいっぱいだし、仮に人間国に行けても、人間国から、魔国エデルドから來

たつてばれたら、殺されると思うんだが？それでもいいのか？」

「う……」

俺は、考える。確かに、ここから逃げた場合、魔族とかに見つかってやられるかもだし

かと言って、人間国とかに無事入っても、この国から来たつてばれればどうなるか

分かった物じゃないし……そう、考えて、俺は、こう言う事にした。

「わ、分かった……部下をやつてやる」

「よし、決まりだな、あゝこれから楽しくなりそうゝ私の事は、マイでいいよゝ」

なんか、一気に魔王の話し方が、がらりと変わったので、質問してみる。

「なんか一気に話し方が、変わったんだが……？」

「魔王のイメージって大切でしょ？初めてきた相手には、そういう話し方してるだけよ？別にいいじゃない」

「それでいいのか……？」

「いいの、そうね……貴方の事は、孝之と呼ぶわね、じゃあ、孝之、貴方の部屋を用意させるわ、スミレ！出てきなさい！」

マイがそう言うと、天井がパカッと開いて、一人降りてきた。

「マイ様、お呼びでしょうか？」

「孝之は、あの部屋を使つてもらうわ、案内しといてくれない？」

「かしこまりました、マイ様、では、孝之様、ご案内します」

「あの一つ質問にいいですか？」

「はい？なんででしょう？」

「なんで……メイド服なんです？」

そう、スミレと呼ばれた人の恰好は、カチューシャにメイド服を着ていた。

あまりにも場違いだろ！？と思うのだが……

「これは、私の趣味で着てるだけですが？何か問題でも？」

「い、いえ・・・」

「では、孝之さま、部屋にご案内します、ついてきて下さいませ」

「は、はあ・・・」

「じゃあね？孝之、何か用があつたら、呼ぶわよ」

「了解・・・」

そうマイが言う。俺は、そう答える事にした。

スマレと呼ばれた人に、案内されて、一端部屋を出て長い廊下を歩き、一つの部屋に、たどり着く。

部屋の前にたどり着くと、スマレがこう言ってきた。

「ここでございます、では、ごゆるりと、っは！」

そう言つて、スマレはジャンプして、天井がパカッと開いて、そこに消えていく。

うん・・・何なんだ？この仕掛けって・・・、そう思いながら、部屋の中に入り

ベットがあつたので、そこで休む事にした。

なんか、疲れたので、これからの事は考えない事にしてさっさと休む事に決めて、目を閉じたのであつた・・・

「プロローグ」魔国に迷い込みました（後書き）

はい、零堵です。

新しく投稿します。

できる限り続けようと、思っているので、よろしくです。

く第一話く魔法を覚えようく初級編く（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

〈第一話〉魔法を覚えよう〈初級編〉

目が覚めて、まわりを確認してみても、元の世界に戻ると言う事はなく

魔国、エデルドと言う場所だった。

やっぱり戻ってないんだな・・・と改めて実感、ま、来ちゃったものはしゃ～ないか・・・と思い

どうしようかと悩んでいると、コンコンと音がして

「孝之様、入ります」

そう言った瞬間、扉がバカッと開いて、部屋の中に入ってきたのはメイド服を着た、スミレさんだった。

「よく、お休みになられましたか？」

「いや・・・うん、あのさ・・・」

「はい？」

「なんで、扉をぶち破る必要があるの・・・？」

さっきの一撃で、扉は五メートルぐらい吹っ飛んでいた。

うん、かなりの馬鹿力じゃないか？と、思うんだが・・・

「気にしないで下さいませ、あとで直しますし」

「いや、気にするよ!？」

「そんな話は置いといて、孝之様、マイ様がお呼びですので、ついてきて下さい」

「あ、うん、分かった」

そう言って、俺は、スミレさんの後ろをついて行く事にした。

部屋の中を出て、長い廊下を真っすぐわたり、赤い扉をくぐると、王座に座っている

マイ三世がいた。

「マイ様、孝之様をお連れしました」

「Okよ、じゃあ行きなさい」

「は！承知しました」

そう言つて、スミレは、ジャンプして天井に消える。

うん・・・ほんとにこの人、何者なんだ？と思うんだが・・・

「よく休めた？」

「まあ・・・休めたと言えば、休めたけど・・・ところで、一体俺に、何の用事だ？」

「孝之の身体能力が、どれぐらいかを知りたくなつてね？孝之、魔法つて使える？」

「使えるわけないだろ、普通の一般人だし」

「その一般人と言う概念が私には分からないけど、じゃあ・・・魔法を覚えてみる？」

「魔法つて、俺にも出来るのか！？」

「魔力が、あれば誰にでも出来るわよ？ちよつと魔力を調べてみるわね」

そう言つて、マイは、何か呪文らしき言葉を言う。

「サーチャースタイル」

そう言つと、俺の体が薄く光りだし、目の前に数値が現れた。

「ふむふむ・・・」

「で・・・ど、どうなんだ？」

「孝之、魔力が物凄いわよ？というか、私とほぼかわらないんだけど？何これ？」

「変わらないつて・・・魔王と同じ魔力があるつて事？」

「そう言う事になるわね・・・あ、なんだったら、魔王、貴方がやる？私、譲つてもいいわよ？」

「冗談言わないでくれ・・・」

「冗談じゃないのにな・・・ま、いいわ、魔力はあるみたいだし、早速魔法を教えるけど、どんな魔法がいい？」

魔法か・・・まさか自分が使えるとは、思つてなかったな

日本じゃ、魔法なんてある訳がないし・・・まあ、とりあえず・・・

「じゃ、じゃあ基本的な初歩の魔法から、学びたいんだが・・・」

「初歩ね？めんどくさいわね？大陸を落とすメテオ級の術とか、そ

ういったのを得意なんだけどな〜・・・」

「・・・さすが魔王と言った所なのか？冗談にしても、笑えないんだが・・・」

「まあいいわ、初歩ね？じゃあ、部屋の中で使うのもなんだし、外に行きましよう」

「わ、分かった」

そう言つて、俺とマイは、外に出る事にしたのであった・・・

ゝ第一話ゝ魔法を覚えようゝ初級編ゝ（後書き）

年内、最後の投稿となりますゝ

この一年、結構書いたって感じですかね？

来年もよろしくです。

気が付けばシリーズは、他にもあるのでそちらも読んでみて下さいませゝ

く第二話く魔法を使ってみようく初級編く（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

〈第二話〉魔法を使ってみよう〈初級編〉

俺は、魔法を習うために、外に出る事にした。

外に出てみると、生あつたかい風が吹いていて、草が一本も生えていない。

地面が・・・なんか、青かった。

色的にここは、土の色の茶色だったり、草の色の緑だと思ふのだが・

見渡す限り、真つ青な地面であつた。

「なんなんだ・・・この青い大地は・・・」

「ああ、ここは魔国エデルドの中でも、唯一珍しい、ブルーアースと呼ばれる場所に、魔王城を建てたのよ、ちなみにこの地面は、魔力が含まれてるから、食べると魔力が回復するわ」

「え、食べられるの!？」

「ええ、食べられるわよ?但し、目茶目茶不味いけどね?」

「そうなのか・・・」

「じゃあ、早速初歩の魔法から、教えるわね?まず、魔法には、火、水、風、土、光、闇の六種類あつて、最初に教えるのは、火の呪文よ?小さい火を思い浮かべて、こう言うの、フレアス!」

そうマイが言つた途端、マイの指先から小さい火がぽつと出現した。「これが、第一段階のフレアスって言う火の魔法よ?ちなみにこれを強化すると、フレアードと呼ばれる火の球になつて、さらに強くすると、フレアボールと言う火炎球になるわ、じゃあ、まう最初にこのフレアスを、やってみなさい」

「分かつた、やってみる」

俺は、そう言つて、小さい火を思い浮かべる。そして

「フレアス!」

そう叫んだ。だが・・・

数十秒待つても、小さい火は全くできず、俺は焦つて何回も叫ぶ。

「フレアス！フレアス！フレアス！フレアス！！」

いくら叫んでも、全く小さい火は出なかった。

「うーん・・・どうやら、孝之、貴方は火の呪文は一切使えないみたいね・・・」

「そ、そうなのか？」

「ええ、普通なら子供でも習えば、出来るのだけど・・・」

「ガン・・・俺は、子供よりも劣っているというのか・・・ちよつと、シヨツクだった。

「ま、まあ・・・気を取り直して、次の呪文を教えるわよ？じゃあ、次は、水の呪文ね？水の呪文は、火の呪文と違って、イメージしにくいけど、まず流れる川をイメージして、そしてこう言つの、アクアス！」

そう言つと、何も無い空間から、水が出現して、水鉄砲が一回撃てる量だった。

「これが、水の呪文よ？さあ、孝之、やってみなさい」

「あ、ああやってみる・・・」

そう言つて、俺も頭の中でイメージして、こう言つ。

「アクアス！」

しかし、さつきと同じく、全く反応がなかった。

「マイ・・・俺つて、もしかして才能ないのか・・・？」

「うーん・・・ま、まだ分からないわよ？とりあえず、色々やってみましょう？」

そう言つて、マイは風の呪文、土の呪文、光の呪文を俺に教えてくれたが

俺は、そのどれも使えなかった。

ここまでくると、ちよつとやさぐれるぞ・・・

「もしかして・・・孝之つて」

「な、何？」

「闇の呪文しか、使えないのでは？」

「え・・・闇の呪文？」

「そう、じゃあ初步の呪文を言うわね・・・シャドースネイク」

そう言っていると、マイから黒い何かが飛び出して、マイの形になった。

「これは？」

「これは、私の影ね、この影を相手に飛ばして、相手を動けなくすると言う呪文よ？孝之、やってみてくれない？」

「あ、ああ・・・」

俺は、そう言って、マイと同じ言葉を言ってみた。

「シャドースネイク・・・」

そう言った瞬間、二体の影が出現して、俺と同じ大きさになった。

「やっぱりそうだわ、孝之、貴方、闇属性の呪文しか使えないみたいよ？」

「そ、そうなのか・・・ま、まあ、これが俺の初めての魔法なんだよな・・・」

マイに一属性しか使えないって言われたけど、初めての魔法にちょっと、興奮してしまった。

「なら、闇属性中心の魔法を教えるとしましょうかね？っと、今日はもうここまでにしましょう？」

「ま、まあ、そうだな、ちょっと疲れたし、ところで・・・これ、どうやって消すんだ？」

俺は、自分の二体の影を指さす。

「解除する場合は、ドロップと言いなさい、魔法をキャンセルされるから」

「解った、ドロップ」

そう言っていると、二体の影は、ぱっと消失した。

「まあ、これで孝之は、ひとつの魔法を覚えたってことよね？」

「まあ、そうなるかな？」

「それじゃ、お腹もすいた事だし、城に戻るわ」

そう言って、マイは魔王城の中に入っていく。

俺も、マイの後について行く事にしたのであった・・・

く第二話く魔法を使ってみようく初級編く（後書き）

補足

孝之が覚えた技

シャドースネイク、自分の影を呼び出して、相手の動きを封じる技
うまく使えば、気づかれずに暗殺も可能

はい、零堵です。

あけましておめでとつございます、今年もよろしくです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9433z/>

気が付いたら、魔王の部下になってました・・・

2012年1月1日21時47分発行